

昭和五年十月二十日 第三編 郵政省 行  
昭和二十年二月十二日  
昭和二十年七月七日  
印 發  
本 行

海軍技術中將 永村 清 監修

# 白 船 白 船

昭和二十年(第18卷) 2-3月合併號



船：船  
時：評

## 快なる哉われ等造船者

榑 原 鉞 止

戦局は愈々決戦段階に突入した。今迄は單に序幕に過ぎない。『眞の戦』は今日からである。思ふに今次大東亞戦争はその精戦に於て餘りにも順調であつた。眞珠灣奇襲、香港の攻略、マライ半島破竹の南下、星港の奪取、南方諸島の戡定占領、斯くて『必勝不敗の態勢就れり』とし、官民鼓に口には『勝つて卵の緒を締めよ』と言ひ乍ら、そこに一抹の『氣の緩み』『氣の驕り』が無かつたであらうか。米國の物量、實驗科學力、工業力を過度評價し、米國々民性の正解を誤まり、多少とも『獨りヨカリ』の自己陶醉感に捉はれては居らなかつたか。括言すれば餘りこの戦を甘く見ては居なかつたであらうか。吾人の職域たる造船分野に於ても亦斯る傾向があり現在程の眞剣味があつたであらうか。『戦争は活機である』戦況は一日も停滯しない。日夜に變貌する戦局に應じ造船も亦變通自在、臨機應變以て或はその建造計畫に善處し、船舶の設計並に技術、工作に對處改善を必要とする。死兇の齡を數ふるに似たるも今日に於て之を顧みるにこの兩者に於て遺憾の點が無かつたであらうか。前者は軍略

に役者は吾人の職域たる造船に關係してあるが、專見を以てすれば役者は多少世上に批判論議された問題があつたとしても先づ現象各關係者及び舉國造船所當事者従業員等の眞剣な努力に依つて一應の成功を見たと言ひ得ようが、前者に於ては戦局に克く敏活に追隨對處してその建造船の設計、性能に對し豈切妥當な考慮と處置とを要する、即ち船種、船大、速力、對敵安全性等は平時と異つた基盤から見て活眼を開き迅速に先を見透し現狀に即して立案企畫して行かねばならない。之を吾國のみでなく敵米英に看ても、米の「アグリー・ダックリング」の粗製濫造の大量生産から一部の「ヴェクトリー・シップ」への轉換、英の航海速力15節(?)の「マーチャント・ウォー・シップ」型への一部移行があつた。吾國もこれ等敵側の對戦況計畫變更に先づて米潛艦對策等として之を實施するの要がなかつたであらうか。島嶼帝國にとつて戦争下船舶の喪失程恐ろしいものはない。勿論國策に依る船舶建造計畫を朝三暮四無定見に變更するの性徒らに混  
(80頁へつづく)

### 目 次

|                                  |                                      |
|----------------------------------|--------------------------------------|
| 快なる哉われ等造船者……………榑原鉞止……………53       | 白鹿丸より墨洋丸まで(日本造船外史・2)……………小野楊三……………74 |
| ゲーゼル機關架構の鞭打振動に就て……………龜岡敏雄……………54 | 甲板面に於ける艦裝船渠……………81                   |
| 船舶の推進(7)……………山縣昌夫……………63         | 特許解説……………福田 進……………83                 |
| 木船建造講座(7)……………高木 淳……………70        | 敵米海事委員會の船舶命名法……………62                 |
|                                  | ドイツのコンクリート輪送船……………69                 |